

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
2022年4月9日
文責：JUN

令和4年度は、コロナ後の確かな歩みをつくる年

1 子どものつながりと学びの回復を

コロナ禍で、学校教育が直面した弊害は一つや二つではありませんでした。もちろん子どもの健康・生命が危機に瀕したことが一番だったことに違いないのですが、教育の上でもっとも危うさを感じたのは、子どもと子どものつながりが弱められたことでした。「対面して言葉を交わすペア・グループは自粛しなければならない、給食の時間は黙って食べなければならない、声を出す合唱は控えなければならない、大声を出したり体を組み合ったりする部活動は中止にせざるを得ない、子どもと子どもが関わり合う学校行事は縮小する、そういったことが、全国どこの学校でも実施されたからです。

よく考えてみると、このことが子どもたちにもたらしたものは大変なことだったと考えられます。子どもの心にかかりの影響が及んだからです。交わす言葉が減り一人でしなければならないことが多くなり、多くの子どもの心に不安感が生まれました。通信機器を使えばコミュニケーションがとれるとはいっても、それがまた別の弊害をもたらしたりしました。自分だけに閉じ籠らざるを得ない子ども、不登校になる子どもが増えていったのは必然だったように思います。

一方、学びにもかなりの影響が出ました。「主体的・対話的で深い学び」の登場で、「学び合い」が当たり前のように行われるようになり始めた状況が一変したのです。コロナ禍に陥って2年になる令和3年度の3学期、子どもも感染しやすいオミクロン株が学校を直撃しました。こうしてそれまで感染防止の対策を練ることによってかろうじて行っていた「学び合い」が消え、その結果、克服しかけていた一斉指導型授業がゾンビのように頭をもたげてきたのです。

うつらない、うつさない、何よりもそれを優先させた教室になったことによって、そういう対策を厳密に守ろうとすればするほど、子どもたちは語る言葉を控えるようになりました。それは、分かっても分からなくてもただ淡々とやり過ごす、そういう学び方を身につけることになってしまったのです。

そうなるのはだれのせいでもなく仕方がないことなのだということは、子どもたちにも分かっています。だから、不満は言いません。しかし、明らかに、みんなで学び合っていたそれまでの学校は学ぶ喜びの不十分さに耐えなければいけない所が変わってしまったのです。子どもたちが鬱屈した思いを抱いたとしても不思議ではありません。

もちろん教師もそれなりの対策を講じてきました。だから、そこまで深刻な状況にはなっていないと言う人もいるでしょう。しかしそういう鬱屈した心情は表面には現れず、子どもの心の中で増幅するのです。教師の気がつかないうちに。コロナ禍は、目には見えない、さまざまな弊害を子どもたちにもたらしていたのです。もちろん、それは今も進行中です。

4月になり年度が替わりました。ちょうど蔓延防止等重点措置も解除になりました。そうなる
と、なんだか希望を持ちたくなります。これから始まる令和4年度は、ここ2年間とは異なるも
のになるのではないかと。

コロナ・パンデミックが簡単に収束するとは思えません。現に、新規感染者数は下げ止まり、
微増し始めてもいます。しかし、これまでのような厳しさでの規制はないように思われます。一
気にということではないけれど、これからは次第に収束に向かうという情報も出てきています。
新年度を迎える私たちの気持ちは、総じてその情報通りになってほしいと祈っているのではない
でしょうか。

そこで、皆さんに訴えたいのは、スタートしたばかりのこの令和4年度は、まだまだコロナと
の闘いは続くけれど、これまで2年間に生じた、子どもの心の問題、学びへの不自由さの解消に
向かう年になんとしてでもしなければならぬということです。それは、端的に言えば、子ども
のつながりを回復し、ともに学べる学校にしていくということです。

もっと具体的に言いましょ。子どもを孤立させる一斉指導型授業に決して頼らず、子ども同
士で学び合う「協同的学び」を、その時の状況でどこまでできるかを慎重に見極めながら、でき
る限り取り入れ、そのことにより、すべての子どもの学びと学ぶ喜びを生み出すようにしてい
くということです。そうすることにより、分断されていた子ども同士の関係がよみがえり、「人と人
とのつながり」が回復していくでしょう。

今、私たちに問われているのは、このことにどれだけの思いを込めて、どれだけの熱量で勇気
をもって取り組むことができるかどうかなのです。もちろん子どもの感染が危惧されている今の
状況では、まだ全面的にはできません。しかし、令和4年度中にどういう状況にまでもってい
きたいかというイメージをもって、できることから始めていくことが大切なのではないでしょうか。

2 令和4年度をどう始めるか

コロナ禍で「一斉指導型授業」に陥っていた学びを「協同的学び」「学び合う学び」に戻す、あ
るいは転換する、その歩みを始める、一年の出発に当たり、私たちはそう自覚しなければなりま
せん。

「授業は一日にしてならず、です。日々行っている授業は、いつでも、どうにでもできるもの
ではなく、それまでの何日もの営みで培われてきたものによって形成されます。ですから、コロ
ナ禍の状況をよく見ることは大切ですが、あまりにも慎重になり過ぎて、「一斉指導型」のまま何
か月も過ごしてしまうと、時機到来となり、一気に「協同的学び」に切り替えようとしてもま
くいかない、ということになってしまうのです。子どもは、教師の思惑に合わせて右に左にと都
合よくやってくれるほど器用ではありません。ですから、まだ完全には取り組めない状態だとし
ても、先を見越して、今できることから始めていかなければならないのです。

この2年間でとらざるを得なかった学び方が、子どもにとってつらいものになったということ
は前述したとおりです。ですから、なるべく早くその状況から子どもたちを救い出さなければな
りません。少しでも第6波渦中とは異なるという希望を感じさせなければなりません。

では、令和4年度をどう始めるか、それには夏までにどういうことをすればよいかということ

になります。その具体的方策が分かっているなければ、「学び合う学び」を「育てる」ことはできないからです。

① 安心して学べる学級に ～「分からなさ」が宝物になる学級～

何よりも大切にしなければならないのは、学級を「安心して学べる場、暮らせる場」にすることです。それには次のことが実行できなければなりません。まず、「分からない」と言って尋ねることができることです。そしてその「分からなさ」が大切に受け止められることです。もちろん「間違った答え」が出たときも同様です。さらに、どんな考えも、「違いを大切に」受けとめ合うこともできていかないとはいけません。つまりそれは、「分からなさ」「間違い」「異質な考え」を「宝物」にできる学級にすることだと言えます。

それができる学級をつくるのは教師です。もちろん子ども同士でそれができないといけないのですから、子どもがそのように行動することが大切です。けれども、そんな子どもが育つ教室には、自らそのように行動する教師がいるのです。だから、特に4月は、教師こそが前記のようにできていないといけません。本気で、温かく、すべての子どもに対して、実行できるかどうか、それがその学級の礎を築くのです。

正解が出るのを待っている教師、「わかった?」「できた?」とすぐ言う教師、子どもが課題に取り組んでいるとき、だれがどのような考えをしているかと一人ひとりを見ていない教師、手を挙げる子どもだけを指名して授業を進める教師、教師の問いかけに口々に答える何人かの言葉を相手にして進めている教師、そして、子どもの考えに心打たれたり、喜んだり、心を痛めたりしていない教師、そういった教師だと、安心して学べる学級はつくれないのです。

4月の教室にいなればいけないのは、正解を急ぐ教師ではなく、子どもの「分からなさ」や「間違い」を「宝物」にして、分からなくても間違っても、安心して取り組める学級をつくろうとする教師なのです。

② 教えることよりも、子どもに考えさせる

学ぶのは子どもです。ですから、どの教科においても、課題に対する子どもたちの考えから始めなければなりません。そして、分からないこと、課題に対して、諦めず、粘り強く取り組める子どもにしなければなりません。

その時、教師がもたなければいけないのは、結果よりも過程を大切にすることです。結果だけに目を向けると早く正解を出そうとします。過程を大切にすると、ああでもない、こうでもないとい取り組んでいることに目が向くようになります。

私たち教師は、「早く分かる」物知りの子どもの育てるというより、「よく考える子ども」を育てなければなりません。今、求められているのは、「思考力・判断力」だと言われますが、それこそ、よい判断をしようとするさまざまな考えることのできる子どもが目標なのです。教師は、「早く分からせたい」という罫にはまってはなりません。

それには、子どもが取り組むようにし、その子どもの活動を見守り、支え、方向づけていく教師の存在が必須です。「分からなさ」を「宝物」にできるのもこの心構えあつてのことです。

とにかく、子どもが、「先生が見守ってくれているから、私の気持ちを分かってくれるから、そ

していざというときちゃんと支えてくれるから、だから間違っても、分からなくても、やる気が出る」と思える先生にならなければいけないのです。

今日は4月9日、来週から本格的に授業を始めていくことになるでしょう。だから、今、皆さんがどういう心構えをもつかが大切なのです。安易に教えて済ませるのではなく、子どもたちが取り組む授業、子どもたちから考えが出る授業にしていってください。もし、そういうふう在意欲的になれない学級であれば、それは自分で考えて発見する面白さを知らないだけなのですから、子どもをその気にさせる仕掛けをし、やってみようという雰囲気をつくり出さなければなりません。子どもたちが変わっていくことほどうれしいことはありません。ですから、「大変な学級だ！」と感じるほどの学級でも、考えようによってはやり甲斐があると言えるのではないのでしょうか。

③ 聴き合う学び方を

子どもたちが学びに意欲的になるために、学校生活に心地よさを感じるために、なんとしても必要なものは子ども同士の良質な関係です。そのため、日本の学校がずっと大切にしてきたことがあります。「学級づくり」と「生徒指導」です。

しかし、子ども同士のつながりはそういった取組だけでは深められません。学校生活の大半は授業時間だからです。つまり、学校は子どもたちにとって学びの場なのです。子どもたちはその授業の中で学びに向き合っています。その学びのために子ども同士の良質な関係が必要なのです。子ども同士のかかわりによって学びが深まるからです。

折りしも、学習指導要領で「主体的・対話的で深い学び」への授業改善がうたわれ、子どもたちによる「対話的学び」が(「協働的学び」とも記されていますが)、つまり子ども同士の「学び合い」が重視されるようになりました。

そうです。子どもの良質な関係性を築くために、もちろん学びそのものを深めるためにも、今こそ大切に実践しなければならないのは、「学び合い」なのです。それがコロナ禍で自粛させられてきたのですから、子どもはかなりの損失を負ったと考えなければなりません。

以上のように考えると、教師が自覚と見通しをもって始めなければいけないのは、子どもたちを「対話的に学び合える」ようにすることだと言えます。それは、単に、グループで学習させればよいということではなく、良質な「学び合い」を目指すということです。また、そのグループの対話に、すべての子どもが参加できるようにするという事です。その第一歩を歩みだすのが4月の今なのです。

そのやり方、方法に定まったものがあるわけではありません。どのように行うかは、学級の子どもたちの状態によります。ですから、先生方がそれぞれに考えて行うようにしていただければよいのです。ただ、そういう方法ややり方としてどういう方法をとろうとも、共通して大切にしなければならない軸になる考え方があります。

その第1は、「学び合い」は話し合いではなく「聴き合い」だということです。相手の考えを聴くことを大切にしないかかわりは、単なるおしゃべりになってしまいます。第2は、学びを、グループを構成する全員の考えに基づいたものにするということです。それには、違いを尊重する聴き方をしなければなりません。そして、第3は、互いの考えの主張だけにならないで、よりよいものを目指す建設的なものにするということです。

ここまで、新しい学級のスタートにおいて大切にしなければならないこととして3つのことを述べてきました。

「わからなさや間違いを宝物にすること」、「子どもが考えることから始まる学びにすること」「聴き合う学び合いにすること」、この3つです。

私は、昨年、『続・対話的学びをつくる』(ぎょうせい)という書を出版しましたが、その第I部、第一章に、上記の3つに関することを詳述しています。右に掲げたのは、その第一章各節の見出しです。本日よりここまで述べてきたことについてさらに詳しく考えてみたいと思われましたら、この部分を再度読んでいただきたくお願いいたします。

学びはわからなさや間違いから

- なぜ、「わからなさや間違い」を大切にするの？
- 「わからない」と言えないのはなぜ？
- 「わからなさ」を大切にする価値観にどう切り替えるの？
- 子どもの「わからなさ」をどうやって見つけるの？
- 「わからなさ」の値打ちは、どのようにしたら示せるの？
- 「間違い」に「学びのつぼ」があるとはどういうこと？
- わからない友だちへの応じ方はどう指導すればいいの？

聴く力を育て聴き合う学級にする

- 聴ける子どもに必要なものは？
- 聴ける教師の下でしか聴ける子どもは育たないとは？
- 聴いてよかったという思いを生み出すには？
- やめたほうがよい教師の指導とは？
- 聴き合えるペア・グループはどう育てればいいのか？

④ すべての子どもの学びをつくる「ペア」こそ

新しい学級の始まりにおいては、前述したような「聴き合い」のできる「学び合い」を目指すのだということを子どもたちに明確に伝えてから取り組みを始めなければなりません。そして、すべての子どもが語り聴くことのできるようにすることです。それは、全体ではもちろん、人数の多いグループでも難しいかもしれません。だから、最初は、「ペア」をしっかり経験するのがよいのです。それは長年、多くの学級の「学び合い」を見てきた私の実感です。

なぜ、グループの前に「ペア」なのか、それは、1対1で行う「ペア」が対話の基本形だからです。1対1だと、一人ひとりすべての子どもがしっかり自分を発揮できます。だれ一人として傍観的になりません。その「ペア」がよりよくできないのに「グループ」にしてしまうと、一部の子どもがしゃべるだけになったり、みんなが話していたとしてもおしゃべりの場になったりしてしまうのです。ましてや、20人も30人も学級全体の「対話的学び」は、それ以上に難しいことになるでしょう。取組の最初は「ペア」、これはその後どのように発展させていくとしても必須のことだと言えます。

どの教科の授業においても、1時間の授業において複数回「ペア」を入れた方がいいです。「ペ

ア」をすれば、すべての子どもが学びに参加できます。「分らなさ」や「間違い」も出して支え合えます。もちろん、前述したように、先生が率先して「分らなさ」や「間違い」を大切にしているから、子どもたちもそうするようになるのです。

ただ、その際留意しなければいけないことがあります。グループではなくペアであっても、話せない子ども、聴き方のよくない子どもがいて、2人とも黙って向き合っているだけということになる可能性があります。断っておきますが、そういった子どもがいるのは困ったことではないのです。最初はそういうこともあるのです。それなのにすぐ無理だと決めつけてしまっは、いつまでたっても「対話的学び」のできる子どもは育ちません。大切なのは、そういう子どもの現実を教師が「引き受ける」ことです。そして、話せない子どもに寄り添うことです。どうしたら語れるようになるか、聴き合えるようになるか知恵を絞ることです。そして、考えが浮かんだらやってみることです。こうして諦めないで繰り返していくうちに、子どもたちに変化が出てきます。それはうれしいことです。そのうれしさを心待ちに、粘り強く子どもとともに実践することです。子どもの学びにとって「ペア」は必須のことだと考えて。

学びを深めるには、どういう課題を教師が提示するかとか、子どもにどういうノートのとらせ方をするとか、いつどのようなときにタブレット端末を使うとか、子どもの考えを深めるためにどこでどのように「足場かけ」をするかといった重要なことがたくさんあります。

しかし、ここに記した3つのこと「わからなさや間違いを宝物にして、安心して学べる学級にする」、「教えることよりも、考えさせることを大切に」、「ペアで聴き合える学級にする」ができていないと、何をしても実は上がらないのです。

ですから、4月から5月にかけてやらなければいけないのは、ここに記したことなのです。

3 読む学び方を、見通しをもって育てる

授業を参観したとき、毎年感じるがあります。それは、見せていただいたその授業は、4月からその日までの先生の指導の下子どもたちが取り組んできたことが土台となって形成されているということです。ある教師が、参観したある先生の授業に強い憧れを抱き、湧き上ってきたそのようにやってみたいという衝動を抑えることができず、その気持ちをぶつけるように授業をしたけれど、そのようにはならなかったということがありました。そうなったのは、この教師が参観して憧れた授業のその日までに、その学級でどのような取組が行われてきたかを見ることなく、自分が目にしたその日の事実だけでやってみたからです。もし彼が、憧れの授業ができていった「実践の筋道」を見ようとしていたら、慌てて授業をすることなく、その前の段階から取組を始めたことでしょう。

授業は、どの教科であろうと、一年間にいくつもの教材で行います。それらの教材を何の脈絡もなく、1つひとつ単独のものとして授業していたのでは、「学びの筋道」はできず、子どもたちにその教科の学び方は身につけません。そんな状態で「主体的に」などと言っても、子どもはどうしていけばよいのかわからず、「主体的」という言葉は空念仏に終わってしまいます。

本たよりの1と2の項目に記したことを読み直してもらえれば分かっていただけだと思いますが、そこに記載したことは、すべて、「協同的学び」「学び合う学び」をよりよいものにする「筋道」のもっとも基本的なことでした。私が、一年の出発に当たり、どうしてもこのことを書いて

おこなければと思ったのは、これから皆さんが一年かけて積み上げていかれる「授業づくり」にその「筋道」が必要だし、今、始めてもらう実践は、その見通しのもと行っていただきたいと思ったからです。

「筋道」を見通すことの大切さは、それぞれの教科の学びにおいても存在します。そしてそれは、教科の特性に応じたものになります。そこで、「学びの筋道」に基づく教科の4月のスタートの一例として、「文学(物語文)を読むこと」の「始まり」を見ていただくことにします。もちろんこれは、一つの事例です。どの学年、どの学級にも当てはまるものではありません。しかし、学年や子どもの状況の異なりに応じて、それぞれに工夫してもらえるのであれば、皆さんが形づくるさまざまな教科の「筋道」の参考になるのではないかと思ひ掲げてみることにします。

① ゆっくりていねいに、状況を推し量りながら音読できること

読む学びにおいて、何よりも大切にしなければならないのは「音読」です。読みの深まりは、どれだけ言葉に触れたかという質と量によって決まります。それには、言葉に触れるように読まなければなりません。「ゆっくり、ていねいに」と記したのはそのためです。しかし、ただゆっくり読んでいけばよいかというとそういうわけでもありません。ゆっくり言葉を追いながら、物語に描かれている状況を推し量ることが大切です。そうすれば、作品の世界が子どもたちの頭の中に入ってきます。

② 読み描けること

物語を読むということは、主題は何か、この作品で何を訴えているのかということよりも、書かれている状況をあたかも目の前で見ていくかのように「読み描く」ことができなければいけません。登場人物の「心情」を読むことも必要ですが、その前にその人物をめぐる状況が「見えて」いなければいけません。音読をして、「頭の中のスクリーンにどんな様子が映ってきたかな」というふうに描き、描けたことを「語り、聴き合う」ようにしたいものです。

③ 書いてあることの大体が分かること

物語を読んで、それがどういう物語だったか、それが分からないまま、作品のここそこについて子どもたちに問いかけると、子どもの考えることは作品の部分的なもの、断片的なものになってしまいます。物語には筋があります。登場人物がさまざまな出来事を通じて変わっていく、そこに読む面白さがあります。ですから、物語に出会ったらその筋をとらえさせたいと思います。それには「あらすじ」を書かせることよいのです。もちろん「あらすじ」が書ければその物語の大体は読めることになるのですから簡単なことではありません。ですから、子どもによってはかなりの援助が必要です。その援助をしてでも書けるようにする、そのことによって、子どもたちの読む力はぐんと育ちます。

④ 心に響く言葉を見つけること

1つの物語は、無数の言葉の連なりによって構成されています。そのたくさんの言葉の中から、心に迫るような言葉や一節に気づかされると読みが一気に深まることがあります。もちろんこの言葉がそれだと決まっているわけではなく、読者によって異なってもよいのですが、中には、ほとんどの人の心に響く言葉もあります。そういう「心に響く言葉」を見つけだせるようにすることも大切なことです。そのため、これまでに行われてきたのは「書き込み」という読み方です。この言葉でこんなことを感じた、このように読んだというようなことを、その言葉の脇の行間に書き込むのです。もちろん、何の指導もしないでどの子どもも書けるわけではありません。ある場面を教師の発問によって読んで、その後、その場面について書かせてみるということから始めた人がいます。言葉に触れて学んだ後なら、初めて書き込む子どもも書きやすいだろうと考えたのでしょう。書き込みをやってみた後、みんなの書き込みを掲示して学び合った人、何人かの書き込みをコピーしてそれをテキストに指導をした人もいます。そういう丁寧な実践がされることで、子どもたちの言葉への感覚が深まっていくのです。心に響く言葉を自ら見つけようと教材研究している教師だからできることです。

⑤ 自分の読んだことを語り聴き合ってみること

文学の授業を深めるうえで、それぞれの読みを出し合い聴き合うことは必須です。しかし、みんなの前で話すことに積極的になれない子ども、友だちの読みを聴いて自分の読みとつなげられない子どもは、結構たくさんいます。しかし、最初は、そういう状態で普通なのだと思うことです。そのうえで、とにかく、語ってみよう、そして聴かなければと思えるように仕向けて行くのです。そのうえで、「こんなことを見つけた」「こういうことだったんだ」などと、聴き合うまでに考えていなかったことを発見できると、子どもの意識は変わってきます。そのとき行くとよいのが「ペア」なのです。そしてその後「ふり返し」を書かせるのです。子どもの書いた「ふり返し」は必ず読んでやらなければいけません。そしてよいと感じたところを抜き出して褒めるのです。もちろん「グループ」で聴き合ってもいいです。こうしたことを何度か繰り返すのです。そうすることで読みを出し合い聴き合うことの楽しさがきっと子どもたちの中に芽生えてくるでしょう。すべて、今後行うことになる「読み深めの学び合い」の基礎にするためです。

令和4年度の始まりに当たり、今、どんなことが大切かということを書きました。「始めよければ終わりよし」という言葉があるように、始まったばかりのこの時期こそ大切にしなければなりません。掛け違えたボタンを直すことは簡単なことではないからです。

コロナの感染状況への不安感は消えません。しかし、子どもの心の不安感、学びの遅れをそのままにすることはできません。どうか、コロナの状況が落ち着きますように、そして、全国の学校で、ここに記したようなことが実現しますように。心から祈っています。